

# 「 さ さ え 」

2020年4月発行 情報誌 第71号

発行 NPO福祉用具ネット事務局

住所: 福岡県田川市伊田 4395 (福岡県立大学内)

TEL/FAX: 0947-42-2286

E-mail [npo-fukusiyougunet@sage.ocn.ne.jp](mailto:npo-fukusiyougunet@sage.ocn.ne.jp)

新 URL <http://npofukusiyougu.sakura.ne.jp>

情報誌「ささえ」は年4回(1月・4月・7月・10月)発行しています。

印刷 よしみ工産(株) 北九州市戸畑区天神1丁目13-5

**福祉用具はあなたの自立をささえます。**

**あなたのささえがNPO福祉用具ネットを元気にします。**

NPO福祉用具ネットは『抱え上げない介護技術』を推進します。写真のような介護はやめましょう。



洗髪シャワー



NPO福祉用具ネット開発品第1号  
【製造元】  
(株)福祉SDグループ  
平成27年より、充電式も発売開始。【発売元】キヨタ(株)

これまで、NPO福祉用具ネットが関わった  
主な開発協力品 (現在は製造中止となっています。)



アルファブラ  
ソラ クッション

SORA



尿吸引ロボ「ヒューマニー」



特定非営利活動法人  
**NPO福祉用具ネット**

「大切な芽を皆さんのやさしさに包まれながら育てていきたい…」

# ベストグループにおけるノーリフティングケアのとらえかた ～ケアを「あたりまえ」にするために実践していること～

辻口 伸弘（ベストグループ）

## ノーリフティングケアとの出会い

ベストグループがノーリフティングケアについて本格的に取り組むのははじめて4か月が経過しました。

「3年後には全職員がノーリフティングケアを理解し、あたりまえにノーリフティングケアを行い、ご利用者およびスタッフに安心と安全を提供する」という目標に向かって職員一丸となって取り組んでいるところです。

私自身がノーリフティングケアのことを知ったのは、実は7年以上前になります。そのころはノーリフティングケアという言葉はまだありませんでした。抱える介護が当然ともいえるその当時では、こんな技術や考え方があるのかと感動したのを今でも覚えています。これは早速現場に導入すべきと意気込んでみたものの、いざ実践しようとしても、自分のうの覚えの知識では到底うまくいきませんでした。

最悪なのは現場で行われていたケアは良くないとわかっていても見過ごすことしかできなかったことです。大変悔しい思いをしていました。それからも研修会や講習会にたびたび参加してきましたが、なかなか現場に結びつかず、定着させることが出来ませんでした。一時的に知識や技術を得ただけでは職場を変えることはできないことはわかっていたものの、研修会にも毎回参加できるわけでもなく、技術テキストのようなものも無く、打つ手がない状況でした。

大きく風向きが変わったのは平成31年です。NPO福祉用具ネット（以下 NPO）で開催された技術認定研修にスタッフが参加し、認定試験に合格したこと、さらに専門の技術テキストが出来た事で、ノーリフティングケア普及の道筋が見えてきました。また現在も2名のスタッフが指導者になるべく研修を受けており、今春試験を受ける予定です。そのことも大きな材料となっています。またNPOでも試験に合格した指導者が現場でしっかり指導できるように、定期的なフォローアップ研修を行っており、より定着しやすい環境が整ってきています。

## ベストグループでの取り組み

ベストグループでは令和2年1月より本格的に

ノーリフティングケア普及の活動をスタートしました。現在どのような活動を行っているかを紹介していきます。

### ①ノーリフティングケア委員会の発足

委員会のメンバーとして認定研修修了者と研修受講者の計3名をコアスタッフとして招集。その他主に直接介護を必要とする事業所の管理者やスタッフの10名ほどで構成し定期的に会議を開催しています。

### ②アンケート調査の実施

職員230名を対象に行いました。現在腰痛があるというスタッフが56%、過去腰痛があったというスタッフを含めると85%がなんらかの形で腰痛を抱えているという結果になりました。また腰痛と合わせて手や肩など複数箇所同時に痛みを抱えているスタッフが大多数で、職員の9割が痛みに関してなんらかの問題を抱えています。このままではスタッフへの負担は減るどころか益々悪化をたどる一方であり、ノーリフティングケアの推進や職場環境の改善が急務であることがわかりました。

### ③毎月研修会の実施

技術と知識を広め、現場で生かすため、技術テキストに沿って月2回（予備日を含む）を開催しています。参加対象は全職員としています。直接介護者だけでなく、どの職種の方も参加可能で実際ケアマネージャーなども参加しています。1年間で全プログラムが終了し、毎年繰り返す予定です。基本的には月1回を全体での開催として、研修参加者がさらに各事業所にて伝達講習を行います。現在毎回10事業所から30人ほどが参加していますが、グローブでの圧抜きを体験しただけでその良さを理解し、とても前向きに研修に参加するようになっていきます。

### ④テキスト、グローブの普及

ノーリフトケア実践マニュアルをグループ内の標準テキストとし、新人職員はもちろんの事、現任者や介護従事者以外の人すべてに行き渡らせたいと考えています。研修においてもマニュアルを中心に進めているため、テキストの所有が必須となります。

グローブも、各自で所持し常に携帯し、いつでも使用できるよう啓発しています。私自身も各事業所を回る際には必ずグローブを携帯し、ご利用者の姿勢保持や圧抜きに使えるようにしています。

職種関係なくスタッフ全員にテキストとグローブを普及し、サービスの垣根を越えてご利用者のケアを行っていくことが大切です。常にグローブを携帯し、気になるご利用者には圧抜き等のケアを行う。ケアの際には必然的に会話も生まれるでしょう。そうやって誰もがご利用者の良き理解者になれることが深い支援に繋がり、信頼関係を築けると信じています。

#### ⑤ 福祉機器の導入

完全にノーリフティングケアを行う体制にするには福祉用具の導入は欠かせません。福祉用具といえば高齢者の事業所だけに目が向きがちですが、障がい児や障がい者の施設においても介護が必要で、介助する際には抱えているのが現状です。これから様々な環境に適した福祉用具について知識を深め、適切な福祉用具を導入していく予定です。先月も重症心身障がい児・者の施設に床走行リフトを導入しました。

#### ⑥ テキストに沿った社内認定制度の導入

社内に広めていく手段のひとつとして、NPOでも行われている、認定制度の導入を予定しています。社内での研修参加者の中でも特に意欲的な職員を対象に、NPOでの認定試験に合格した職員を軸に年間の研修終了後に認定試験を行い、その合格者を社内での指導者に育てていく予定です。合格者を適切に評価できるように、社内の評価制度と連携させて、しっかりと評価していきます。適切な評価をすることで、この認定制度が職員のモチベーションにも繋がると考えています。

以上が現在の活動です。たくさん改善することはあるでしょうが、この活動を軸に進めていきます。

### ベストグループがやるべきこと

ノーリフティングケアはベストグループでもう1つの軸となっている、ユマニチュードの手法と合わせて、介護の基本となるものです。直接介護を行うスタッフはもちろんの事、介護職以外の職員であってもケアについて知る必要があります。介護職だけが熱心に取り組んでいても、その他で方向性が違うとすべて台無しです。まずはすべての職員にノーリフティングケアの意義を伝え、浸透させていきます。

誰も良くない介護をしたいわけではないのです。ただ知識が無く、技術を知らないから「自分が出来る事=抱え上げる介護」になっているのです。それが介助者の負担になり、ご利用者の2次障害になる

のです。お互いとても辛く、きつい思いをしています。お互いにとって悪でしかないのです。結局ケアを知らない事が自分の仕事を大変にさせているだけなのです。

ノーリフティングケアを学び、あたりまえにすることで、ケアに安心・安全が生まれます。そのことはご利用者だけでなくスタッフにも言えることです。適切なケアにより心身ともに余裕が生まれ、その分ご利用者により深く寄り添う事が出来ます。さらに介助以外のサービスにも力を入れることが出来、より手厚い支援が行えます。

### 最後に

ベストグループでは3年でノーリフティングケアを完全に普及させるべく皆で頑張っています。現状を変えるには大きな力が必要です。私のように会社の経営者が先頭に立っている事はとても良い環境にあることは承知しています。その反面、有利であることでのプレッシャーも感じています。そのような中での成功がとても重要で、後に続く方々のためにも、大きな意味を持っています。

ケアの普及に向けては今後、様々な困難が予想されますが、我々は信じて前に進みます。福岡県でも県を挙げて取り組むことが決まっていますし、NPOの協力も得られるでしょう。どちらにせよ今まで何も出来なかったのです。やる事が分かっている、その環境もある。何も恐れることはありません。ひたすら前進あるのみです。まずしっかりと基本を学び伝え、ノーリフティングケアをあたりまえにします。我々がそれをやりとげることで、それが介護の基本となり、地域での介護技術も大きく変わるでしょう。その先駆けにベストグループが関われることに喜びを感じ、楽しみながらノーリフティングケアを実践していきます。3年後のあたりまえを信じてどんどん突き進みます。

<研修会の様子、抱えない体操>



# 京築地域での「抱え上げない看護・介護技術」 普及・啓発活動の紹介

井内 陽三（NPO 福祉用具ネット理事、理学療法士）

今回は、「抱え上げあげない看護・介護技術」の普及・啓発を図る地域活動の紹介を行いたいと思います。

現在、私達が活動を行っているのは、福岡県内の京築地域という場所です。地域の呼び方は色々あるので、具体的な市町村名でいうと、苅田町、みやこ町、行橋市、築上町、豊前市、吉富町、上毛町の2市5町のエリアになります。この圏域の人口は、約18万4000人で、65歳以上の高齢化率は30.2%、同年の全国平均は26.6%で、全国平均より高齢化率を先取りしているようです（日本医師会のホームページ、2015年統計発表）。

地域全体では、人口減少が進んでいますが、行橋市、苅田町では、横ばいか、微増の状態です。

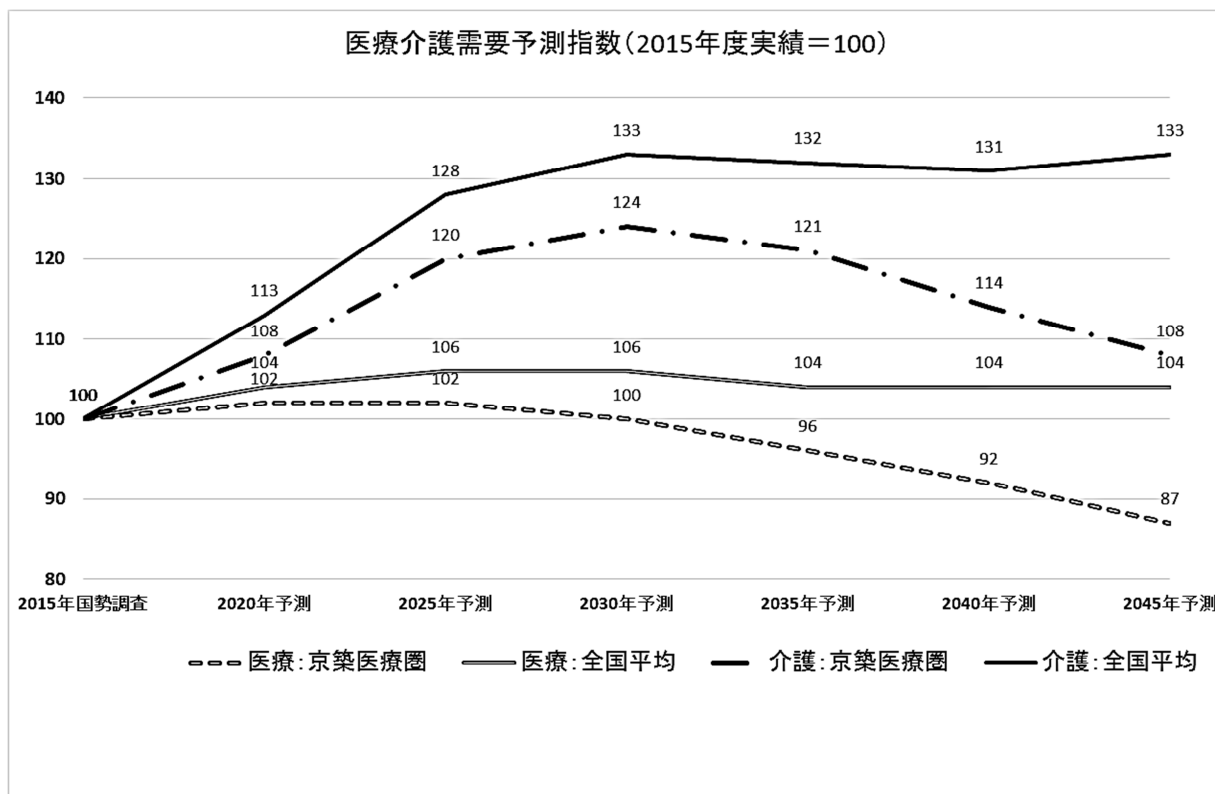
地域の特色としては、生活環境面では、自動車生産工場がある事から、自動車生産関連の業種で働く方が多い土地柄です。海・山が近く、潮干狩りを楽しめる浜や、いくつものキャンプ場があるなど、自然が豊かに残る地域です。また、果物栽培も盛んで、果樹栽培、ハウス栽培などもされています。

介護・施設サービスの特徴としては、全国平均と比べ、人口当たりの施設系サービスの定員はやや多いようです。今後2025～2030年にかけて医療介護の需要のピークを迎えます（グラフ：日本医師会 HP 京築医療圏 医療介護需要予測指数（2015年実績＝100）を参照し筆者が再作成）。



活動開始当初、私を含めた数人のメンバーは、NPO福祉用具ネットの研修会や勉強会を中心に個々人のスキルアップを図ってきました。

その後、平成29年10月、「抱え上げない介護技術セミナー」でリーダー養成コースが開催されると、京築地域から参加があり、メンバーが増えました。さらに、認定試験の勉強をしつつ活動する方が加わり、現在10名の活動メンバーです。



活動メンバーは、それぞれに職場や家庭の都合があり、同じ時間に同じ活動ができているわけではありません。しかし、活動の意義は理解できているので、各人が「できる時に、できる範囲で活動をする」スタイルですめています。研修会参加を周囲へ促してもらう事や、勉強会の補助スタッフが必要な時には、応援してもらうなどです。

平成29年3月頃から開始した、約3年間の具体的な普及・広報活動の経過を報告させていただきます。

当初、既存団体の企画で実施することからスタートしました。この団体は、私自身が数人の他職種の仲間と企画・運営。地域の福祉・医療の垣根を越え、多職種の交流や、スキルアップに活かしてもらうことを目的に活動を行っていました。「抱え上げない介護」の考えや取り組みは、子供から大人まで、障がいに関係なく必要であると思いましたので、この会のメンバーに説明し、賛同を得て研修会を実施しました。

記念すべき第1回目は、「抱え上げない介護のススメ」(第1弾)と題して、石橋 弘人 氏(一社 こうしゅくゼロ推進協議会 副代表)、白石 源成 氏(特別養護老人ホーム ふじの木園 作業療法士)に、実践地域の取り組み・効果の紹介や、特養での実践報告の講演をしていただきました。医療・福祉分野の様々な方、約70名の参加があり、非常に興味を持っていただけました。

第2弾として、山形茂生 氏(コネクトリハビリテーション 代表 作業療法士)に講師をお願いし、実技研修を行いました。40名の参加があり、会場は熱気で包まれました。NPOの研修を受けた方にも、遠方から実習補助として協力頂き、盛況のうちに終了しました。

第3弾は、活動メンバーが所属する老人保健施設で、再度、石橋 氏に講演を依頼しました。また、私も地域メンバーの代表として、抱え上げない介護のプレゼンテーションを含む、デモンストレーションを行いました。参加は約80名。多くの方にアピールできました。デモンストレーション時には動画を撮られるなど、緊張しきりでした。

前述の第2弾、3弾の講演開催の同時期に、業務後に参加できる地域勉強会もスタートしました。会場は、活動メンバーの所属する病院をお借りし、第1クールでは、月1回の頻度で、全5回開催。第2クールは、月2回の頻度で、全6回開催できました。

しかし、1クールは各10人前後、2クール目は、は5人前後に減少。継続しての参加者も少なく、参加者1名に指導者2名の回もあり、活動継続の危機でした。

ここまでの活動を通して、福祉医療に携わる方々、地域在住の方など、様々な方とお話し、いくつか教えて頂けたことがありました。

#### ① 人材・教育の面

自動車産業があることで雇用もあるのですが、景気の波により流動性もある状態。福祉職のOBの方のお話では、景気変動があった時期に、知識・経験を持った人が多く残った施設では人材育成が上手く継続できたが、上手く行かなかった施設は、教育面などで負担が大きくなった。

研修会は、人が多い都心で開催される事が多く、業務後の参加が困難。(現在は、国や市町村など、行政の後押しもあり、地域での研修会は、飛躍的に増加しています。)特に福祉用具の活用や、介護方法の研修などを受ける機会が少ない。また、職場以外の勉強会に参加するのも、費用や時間的な制約が大きい。

#### ② 地域の関係

地域では広域に福祉職のつながりがある。多施設を運営している法人などは、同一法人では情報が伝わりやすい。

このような情報を活かしつつ、研修会参加者との会話や、講演会・実技研修会のアンケート結果を再度、メンバーで見直しを実施しました。

大きな講演や実技研修会での反応は良いが、実際に現場で活用するに至らない状況がありました。

そこで方向性を再度検討し、出した結論は、「よし 興味を示した施設に乗り込もう！」

研修会参加者の反応や会話から、施設内での研修に取り組んでもらえそうな介護付有料老人ホームを選び、施設長さんと直接交渉。拙い話を聞いてもらえ、介護に真摯に向かい合う熱い思いを逆にいただくと同時に、施設内での研修会開催を快諾いただきました。全4回、常時15名前後の方の参加があり、大変熱心に取り組まれ、予定時間を毎回オーバーするほどでした。

次は、老人保健施設。前述の第1から3回の講演には毎回数人ずつ参加があり、すでに「ノーリフティングケア」の言葉は浸透しつつある施設でした。しかし、技術面はこれからとのことで、その指導・フォローの希望を受け実施。回を追うごとに予定外の参加者が増え続け、常時25人前後の参加がありました。関連施設の職員も参加。参加できない方向けに、ビデオ撮影もされ、大変熱心に取り組まれました。また、アンケート結果から、延べ参加者は57名。看護職や介護職をはじめ、事務職や栄養士の方を含む、全職種の参加をいただきました。研修後、研修参加職員の要望が高かった福祉用具をすぐに購

入され、とてもうれしく思いました。

もっと気軽に体験してもらえたらとの思いで、2019年度は、地域の「ふくし祭り」への出店も行いました。主催者から次年度も参加してもらいたいと、うれしい御声をいただきました。

今後の課題もいくつかあります。

まず、一緒に活動してくれる仲間をいかに増やし、普及啓発活動を加速させられるか。同時に地域でどのように盛り上がりを作るか、方法の検討が必要です。

次に、メンバー同士のスキルアップも重要です。いかに分かりやすく・簡潔に説明ができるのか。複数問題を抱える方の相談も多いことから、適切な助言ができるスキルをどう身につけるかです。

さらに開催場所などの問題もあります。参加しやすい場所・内容・日時、必要な福祉用具の準備をどう行うかです。

この活動報告をさせていただいている間にも、メンバー間で、「当地域に合った活動は何か?」「進めていくには何が必要なのか?」など悩みながら進んでいる状態です。

当地域の医療介護需要予測を参考にすると、この技術・考え方が必要なピークは5~10年後に迎えると思っています。引き続き、NPOや九州各地で活動している方々等、多くの人の協力を得て、「急ぎながら、確実に」地域での普及啓発活動を推し進めていきたいと考えています。



## 父の筋緊張 2

～患者家族の声～ 患者家族 I



情報誌ささえ70号で父の筋緊張についてふれ、その続きの執筆チャンスを頂いたので、今回は続きを書かせてもらいます。

### A 老健に移った父。

リハビリのスタッフはリラックス姿勢で車いすに座らせてくれるのに、そのスキルが介護スタッフに伝わっていなかったり、父の身体状況に関する多くの情報が共有できていない雰囲気をなんとなく感じ心配をしていました。そのなんとなく感じていた連携や共有不足。それがある日、確信になりました。



### 確信！

ある日、父の病院受診に付き添うために施設へ出向きました。老健の場合、通院は家族が付き添うことが基本

のようです。当該施設としては当然の仕組みでしょうが、あちらこちらの施設を転々とする利用者の場合、利用施設のタイプによって家族にもとめられる内容が毎回変わるので、理解するまで時間がかかります。この施設では病院との連絡のやり取りも家族に任せられ、使用している医療器具がわからず何度も問い合わせたりするなど大変でした。老老介護

の場合、こういった仕組みを理解することも一苦労だろうなあと思います（これは愚痴）。

病院付き添いのことに話を戻します。

園につくとすぐにスタッフさんが父を抱え

「せーの！！」と声をかけあって車いすに移乗させました

こういった場面はどの施設にいてもたびたび見かけます。その場面はまだ不慣れだった頃の患者家族新米時代の私は、これまで何度も専門家に「優しくしてほしいこと」や「家族持ち込みのボード等を活用してほしい」ことなど遠慮しながらお願いしてきました。

が、次第に慣れてきてしまいました（慣れてはいけないのですが）。私は、目を閉じて見ないふりをしていました。そして、小さな声で「お父さん、ごめんね」とつぶやくようになっていました。でも、いくら娘からつぶやかかれても、「痛い物はイタイ！」ので、父はたちまち不快感を表し「うーん！」と声を出し体を突っぱねました。一度、緊張するとなかなか筋緊張がとれず車いすから落ちそうになり困ります。そこで、介護スタッフさんと次のようなやり取りをしました。

私 「いつも、こういう風に体を突っぱねてしまうのですか？」

**スタッフ** 「はい。いつも、体を突っ張って車いすから落ちそうになります。なので、病院へ移送するときは危険ですから、車いすはできるだけリクライニングで倒し、ご家族が横に座って落ちないように支えていた方が良いでしょう。」

と言われました。そんなあ（ノド）シク…

我が家の自動車は車いす対応 N-box です。後部座席を折りたたんで使うタイプなので、大きくリクライニングをするスペースはありません。しかも、本当にそういった身体状況だと、現在使用している車いすに座って通院なんてできないし、それを許可する施設の判断はどうなってるんだ?! と、一気に不信感がこみ上げてきました。

### でも、まてまてヨ。

日頃は夫と二人介助で車いすに移乗してもらい、園内を散歩します。「そのときには大きくリクライニングする必要はない。しかも、父の筋緊張はそんなにないぞ。さらにリクライニングをしすぎるとかえって緊張が高くなるのになあ・・・。」と日頃の父の姿とこの日の様子にずれを感じて不思議でなりませんでした。

そう思ったものの、家族で調整しようとしてもうまくいかない。父の体は緊張して突っぱねたままです。予約時間は迫り早く出発しないと先方に迷惑をかける。気持ちは焦りました。

そこで、「エイ！」と勇気を出して介護スタッフに声をかけ、父担当のリハの先生を呼んでもらいシーティングをお願いしました。

### すると！さすが、プロ！

ティルト機能をうまく使い、奥座りをシッカリさせてくれ、着座してしばらくはフットサポートを外し、大腿部に重さがかかるのを待っておられました。リクライニング機能は少し使っただけです。介護スタッフの車いすの使い方と全く違っていました。

介護スタッフは、体を突っぱねるから突っぱねることを想定した体形に最初から合わせて、父をその上に乗せ落ちないように支えておく。というやり方でした。介護スタッフも良かれと思って手探りでやった結果だと思えます。リハスタッフのやりかたを傍で見ていた介護スタッフが何かに気づいてくれていると良いなと思いながら私は見守っていました。

黙ってみている介護スタッフ。

声をかけあってシーティングをするリハスタッフでした。介護職とリハ職、職種がことなる方で車

いすへの移乗方法は共有はできているのでしょうか。今はその園に父親はいないものの気がかりです。

### ところで・・・

父のその日の通院はとてもうまくいきました。ティルトの角度を変えてあげたり、背中や大腿部の圧抜きをしてあげました。往復とも車の中では、「うー！」と声をあげることはなくホッとして次も付き添えるという自信が湧いてきました。専門家の適切な手技は家族に安心感と自信を与えてくれるものなんですわね。

この施設にはシーティングを上手にできる力はあるけれど、それが園全体に浸透していないのではないのかなと感じました。ということは、患者に接する機会が最も多い介護スタッフがスキルを持っていない恐れは否めません。

事実、その人たちに介助されているある患者さんは、父が入所していた数カ月の間に日に日に拘縮が増していきました。その方は、父とかわらないくらいの寝たきり状態だったけれど、かろうじて口から食事を食べられており、三度三度の食事のたびに車いすに移り、食事をとっていました。ベッドからの移乗、食堂への移動時間、待機時間、食事時間をいれて1時間は車いすにコロんとおかれたきつそうな姿勢で座らせてされていました。移乗の際は、スタッフ二人がかりで「せーの！ドン！」と勢いよく移していました。あつという間に足が曲がり、腕や手首が内側にギュッと入っていきました。

### 何がラッキーかわからない？！



父は胃瘻のためベッド上で栄養をもらいます。なのでその老健では車いすに移る機会は週二回の入浴日のみです。ある意味、移乗回数が少なくてラッキー！でした。車いす上での辛い時間を過ごすのならばベッド上の方がまだましでした。

本来ならば「車いすに座る力があるのに座らせてもらえないなんて、残念すぎる！」と、娘としては不満を持つはずなのに、車いすに移乗させられなくてラッキーと思わせられるとは・・・。

### ほんとうは、できるはずなのに

もったいないなあ

## 事務局だより

### 令和元年12月追加

- 12月17日 開発相談
- 12月28日 事例支援・開発相談
- 試作品施設検証 2テーマ実施

### 情報誌ささえ70号 編集・校正・印刷・発送

《令和2年1月から3月までの事務局のうごき》

### 令和2年1月

#### 新年度の会員募集受付開始

- 1月2日 情報誌発送
- 1月4日 事例支援
- 1月5日 事例支援
- 1月6日 検証のために施設訪問
- 1月8日 パソコンバージョンアップ対策4台  
事例支援
- 1月9日 検証のための施設訪問 買い物支援
- 1月10日 シルバー産業新聞掲載
- 1月11日 キネステティクス®コース3日目  
事例支援
- 1月12日 スキルアップ研修会 開発相談
- 1月15日 事例支援
- 1月16日 事例支援  
西日本国際福祉機器展協議
- 1月19日 事例支援
- 1月20日 開発相談
- 1月22日 事例支援
- 1月24日 開発相談
- 1月25日 事例支援
- 1月26日 技術研修会 後半の部④
- 1月29日 事例支援 検証業務

### 令和2年2月

新事業準備・年度末会計・事業のまとめ、計画

- 2月1日 開発相談 事例支援
- 2月2日 スキルアップ研修会
- 2月3日 新事業打ち合わせ  
企業訪問 事例支援
- 2月7日 開発相談 事例支援
- 2月8日 開発相談
- 2月9日 技術研修会 後半の部⑤
- 2月10日 事例支援
- 2月12日 事例支援
- 2月13日 事例支援
- 2月17日 事例支援 開発品の検証
- 2月21日 福岡県庁 開発相談 事例支援
- 2月25日 事例支援 ゴミ処理
- 2月27日 事例支援 開発相談  
新事業打ち合わせ
- 2月28日 開発相談 事例支援

### 令和2年3月

- 3月1日 事例支援

- 3月2日 事例支援
- 3月3日 開発支援 検証追加
- 3月5日 開発相談
- 3月4日・7日・9日 事例支援
- 3月8日 技術研修会 後半の部⑥ 延期
- 3月9日 開発支援
- 3月11日 事例支援
- 3月14日 新事業打ち合わせ
- 3月20日 技術研修会 補習日 延期
- 3月21日・22日 技術認定チェック 延期

### 情報誌ささえ71号発行・発送の準備

《今後の予定4月から6月まで》

- 4月 理事会
- 5月 理事会
- 5月30日 通常総会
- 6月14日 技術研修 事例検討会
- 6月20日 キネステ体験会
- NPOセンター、法務局諸手続き
- 情報誌72号発行の準備

#### 延期した第3回技術認定チェックについて

3月に計画していた技術研修会及び技術認定チェックは、新型コロナウイルスの影響を考慮して延期いたしました。  
次の開催の日程が決まり次第、関係者の皆様にはご連絡を差し上げます。

#### 新年度の会員募集

##### 令和2年度会員更新手続きについて

令和2年4月からの新年度のNPO福祉用具ネット会員更新手続き、及び新規会員を1月から受付いたします。

但し、NPO福祉用具ネットの事業年度は、4月1日～翌年3月31日までです。今後も引き続きご支援をお願い致します。

#### 令和2年度通常総会のご案内

日時 2020年5月30日14時～開始

会場 福岡県立大学附属研究所中セミナー室

##### ◆審議事項

2019年度 事業報告・決算報告

2020年度 事業計画案・予算案

任期満了に伴う役員の改選について

出欠届（欠席の方は委任状）の提出を5月22日までに提出していただきますようお願い致します。

所定の出欠届及び委任状は、情報誌とともに郵送させていただきました。